マーヴェルの「庭」と17世紀の庭（中編）*

吉　中　孝　志

【キーワード】アンドリュー・マーヴェル、「庭」、17世紀、果実、メロン栽培

さて、これまで我々は、17世紀の庭を知るために主に旅行記に頼ってきたが、以下、我々の知識は、草本誌や園芸書に頼ることになる。[24]

果実

17世紀には「庭」という言葉と「果樹園」という言葉はしばしばそれらが同意語であるかのように用いられていた。多くの園芸家たちが、「楽園とは庭、つまり果樹園である」というような言葉使いをしていた。[25]　だから当然ながらマーヴェルの「庭」の第５連で様々な種類の果物が描かれる。そしてそれらは、エデンの園のような豊穣さを表すために、他の「花々」や「芝生」を含めて、かなり隣接した空間に植えられ、同時に果実を実らせている印象を与えている。

What wondrous life is this I lead!
Ripe apples drop about my head;
The luscious clusters of the vine
Upon my mouth do crush their wine;
The nectarine, and curious peach,
Into my hands themselves do reach;
Stumbling on melons, as I pass,
Insnared with flow'rs, I fall on grass.

(lines 33-40)

マーヴェルの「庭」の話者が、「私が送っているこれは、なんとすばらしい生活か！」と嘆息する官能的な喜びは、『新しい果樹園と庭園』を書いたローソンの「どんなに喜びで包まれるだろうか？」('How will you be wrapt with delight?')、「これはなんという喜びであろうか？」という果樹園での耽溺と共通する。

> View now with delight the works of your owne hands, your fruit-trees of all sorts, loaden with sweet blossomes, and fruit of all tasts, operations, and colours: your trees standing in comely order which way soever you look. / Your borders on every side hanging and drooping with Feberries, Raspberries, Barberries, Currents, and the roots of your trees powdred with Strawberries, red, white and green, what a pleasure is this?[26]

> 自らの手で行った仕事、甘美な花をいっぱいつけた、あらゆる種類の果樹、あらゆる味、効用、そして色をした果物、どちらを見ても美しく秩序だって立っている木々を喜んで眺めよ。どの側の境もグースベリ、ラズベリ、メギの実、フサスグリの実がしだり、垂れ下がり、木々の根元には、赤、白、緑色のイチゴがちりばめられている。これはなんという喜びか？

ローソンの住むヨークシャーでは、ベリー類を栽培するには「幾ばくかの太陽の反射やその他の同様の手段」（‘some reflex of Sunne, or other like meanes’）で助けてやる必要があったが、少なくともマーヴェルの果実と比べてみれば、ローソンの果実は、上記の引用と同じ頁で列挙されている「ケンティシュチェリー、ダムソン、プラム」（‘Kentish Cherries, damsons, Plummes’）を含めて、極めて現実的な、実際にローソンの目の前に存在する果実であったろうということが伝わってくる。ヨークシャーのような「北の国々で最も普通の、最も適した果樹は、林檎、西洋梨、チェリー、セイヨウハシバミ、赤プラム、白プラム、ダムソンやインシチチアスモモである」（‘Fruit-trees most common, and meetest for our Northerne Countries [are] Apples, Peares, Cheries, Filberds, red and white Plummes, Damsons, and Bullis’）とローソンは述べている。[27]

マーヴェルの「庭」で描かれている果物が、林檎以外、イギリスの自然環境の中では栽培に極めて手のかかる果物であったことは、当時の園芸書を読めば明らかである。葡萄園に関しては、ヘンリー８世による修道院の解散後、ほとんど「その整え方を知る者が絶えてしまった」というのが通説であるし、イギリス産ワインは、フランスのガスコーニュ地方から輸入されるワインに対して競争力を持ち得なかったようである。[28]　もちろん葡萄園がなかったわけではないものの、例えば、ハットフィールド・ハウス（Hatfield House）で初代ソールズベリー伯爵によって植えられた葡萄園を1643年に見たジョン・イーヴリンは、そのすばらしさを ‘the most considerable rarity’ という言葉を使って表している。[29]　つまり、レアなのだ。17世紀後半になって、ウィリアム・ヒューズ（William Hughes）が『完全なる葡萄園』（*The Compleat Vineyard: or A Most Excellent Way for the Planting of Vines*, 1665）、セント・ジェイムズ宮殿の国王専属庭師ジョン・ローズ（John Rose, 1619-1677）が『イギリス葡萄園擁護論』（*The English Vineyard Vindicated,*

1666）を出版し、イギリスでの葡萄栽培とワイン産業の奨励をねらったが、期待された効果はあがらなかった。彼らはイギリスで葡萄栽培が盛んにならないのは国民の怠惰に原因があると考えていた。[30]　葡萄栽培に人の手助けが必須であることは、例えば、エイブラハム・カウリー（Abraham Cowley, 1618-67）が詩人キャサリン・フィリップス（Katherine Philips, 1631-64）の死によせた追悼詩の中で、彼女の活気に溢れた詩的想像力が美徳に支えられていたことを表すために、次のような園芸的な比喩を使ったのを読めば判るだろう。

> ... Wit's like a Luxuriant Vine;
> Unless to Virtue's Prop it joyn,
> Firm and Erect towards Heaven bound;
> Tho' it with beauteous Leaves and pleasant Fruit be crown'd,
> It lies deform'd, and rotting on the Ground.[31]

また、ネクタリンは外果皮が無毛、桃は有毛なだけで両者は同属、原産は、ペルシアである。マーヴェルの詩にネクタリンが出てくるのは、詩的文脈からするとその名前が、ギリシア神話の神々の酒、nectar に由来するからだと考えるのが説明しやすいが、それだけではないだろう。ジョージ・エサリッジ（Sir George Etherege, 1635?-91）の『当世風の男』（*The Man of Mode*, 1676）には、当時、桃もネクタリンもロンドンの朝市で売られていたことが窺える台詞が出てくる。[32]　John Harvey の調査によれば、我々が考える園芸商売の始まりは疑いなく17世紀中葉に位置づけることができる。[33]　マーヴェルの「庭」の果物は、それらが17世紀初頭、例えばベン・ジョンソン（Ben Jonson, 1572-1637）が描いた田舎屋敷の庭で「金を出さなくてよい食物」（'un-bought provision'）として栽培されていた、もしくはトマス・ケアリ（Thomas Carew, 1595?-1639?）がサクスム屋敷に満ち溢れていると詠った「その土地本来のうまきもの」（'native sweets'）のような、自己充足的イメージを喚起する果物とは違うのだ。[34]　マーヴェルの果物は、既に貨幣経済、市場経済との関わりを喚起する。そして、それらは高価な果物なのだ。イギリスでの桃の栽培は、ラウドン（John Claudius Loudon, 1783-1843）が19世紀になって出版した『ガーデニング百科事典』（*Encyclopaedia of Gardening*, 1822）においても「通常の季節で露地栽培では、そこそこ完璧に実るものは、わずかな品種しかない」（'In England, there are but few sorts of peaches that come to tolerable perfection in the open air, in ordinary seasons'）と言っていることは重要である。なぜならマーヴェルのネクタリンや桃も、もしこれらが17世紀のイギリスの庭から採って来たものだとすると何らかの人為的な温度管理が必要だった可能性が極めて高いからである。[35]

ラウドンの纏めでは、桃の品種は1573年に2種類、1629年に21種類、1750年に31種類

(‘*There are many fine varieties of the peach*: Tusser, in 1573, mentions peaches, white and red; Parkinson, in 1629, enumerates twenty-one; and Miller, in 1750, thirty-one varieties.’) だったから、マーヴェルの時代にも急速に新しい品種が開発されていたのは事実であろう。[36]　また、「庭」の中の「桃」に付けられた ‘curious’ という形容詞が示すように、マーヴェルの植物はしばしば、当時 the Cabinet of Curiosities と呼ばれた、珍奇な物の収集品箱に収められるようなレア物のニュアンスが強い。例えば、「庭を責める草刈人」の中には、「ペルーの驚異」(‘the *Marvel of Peru*’, line 18) というエキゾティックな花への言及があるし、クロムウェルの庭では、「ベルガモット」が栽培されていたかのように (‘his private gardens, where / He lived reserved and austere, / As if his highest plot / To plant the bergamot’, ‘An Horatian Ode upon Cromwell’s Return from Ireland’, lines 29-32)、また、ローソンの庭と同じようにヨークシャーにあったフェアファックス卿の庭では、ブラジル原産の「おじぎ草」(sensitive plant) が比喩表現の中で想起されている (‘Conscience, that heaven-nursèd plant ... / A prickling leaf it bears, and such / As that which shrinks at every touch’, ‘Upon Appleton House, To My Lord Fairfax’, lines 355, 357-358)。当時、海外各地で植物採集を行い、ロンドンのランベス地区に「箱舟」(The Ark) と呼ばれた博物館兼植物園を開設したジョン・トラデスカント親子 (John Tradescant the Elder, 1570-1638, the Younger, 1608-62) の庭をマーヴェルが訪れていた可能性も高い。この文脈で言えば、マーヴェルの「庭」の「林檎」も他の珍しい果物に合わせて、パイナップル (pineapple) のことだという注釈も成り立つかもしれない。ジョン・トラデスカント・ジュニアがチャールズ1世のために the Oatlands Palace の庭でパイナップルを育てていたという説もあるし、トラデスカント親子の博物館には、乾燥した見本が展示されていたという。[37]　そしてともかくも、「庭」の中で話者がつまずく「メロン」は、マーヴェルの別の詩「バミューダ諸島」では、オレンジ、ザクロ、イチジク (‘the orange’, ‘the pom’granates’, ‘the figs’, ‘Bermudas’, lines 17, 19, 21) と一緒にエキゾティックな果物として並べられている (‘[He] throws the melons at our feet’, lines 22) のである。[38]

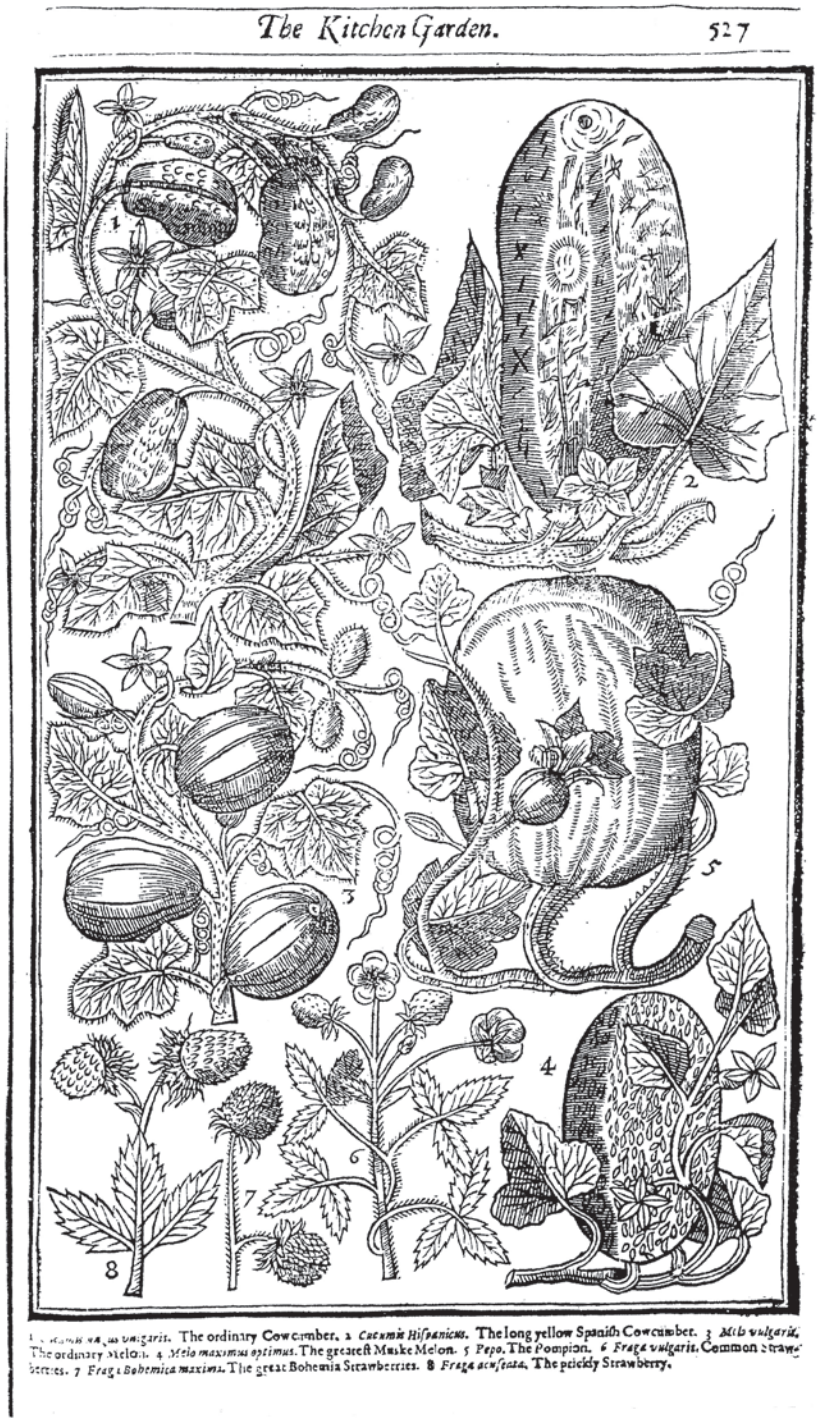
マーヴェルの「庭」の40行目「花々のわなにかかり、私は草の上に倒れる」は、イザヤ書第40章６、７節「人はみな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。たしかに人は草だ。」を反響させて、人間の死すべき運命を、そして34行目の「林檎」と合わせて、エデンの園での人の堕落した状態を想起させる。「メロン」がギリシア語の語源では「林檎」を表すと指摘したのはエンプソンであった。[39]　17世紀オランダ絵画の静物画に描かれた花々や果実は、トロンプ・ルイユ (trompe l’oeil) として実在する植物を写実的に描きつつも、全ては衰え、死んでいく、だから奢りや高慢を避けよ、というメッセージをも排除しない。マーヴェルの列挙した果物はみな、すぐに悪くなる、柔らかい実の果物ばかりである。第９連の日時計を、ヴァニタス静物画 (Vanitas still life paintings) に典型的に描かれる砂

時計や懐中時計の変形として考えることもできるだろう。[40]　そのように、17世紀の現実の庭から、より観念的な庭への身振りを、マーヴェルの「庭」は忘れない。しかし我々は、あえて桃太郎の生まれた桃を現実の桃と同じレベルで考える柳田理科雄のように、マーヴェルの果物、特にメロンを実証主義的にとらえる考え方をもう少し続けてみようと思う。

先に述べたように、マーヴェルの果物は、高価で珍奇な品種であると考えるのが妥当であるように思われる。ヴォン・マルツァーン（Nicholas von Maltzahn）は、1629年に出版されたジョン・パーキンソンの『日のあたる楽園、地上の楽園』（John Parkinson, 1567-1650, *Paradisi in sole, paradisus terrestris*）から都合のいい箇所を引用してメロンは「『この国では近年まで適切に栽培する技術がなかった』ので『その果実が美味なだけでなく珍しいゆえに以前は偉人たちのみによって食されていた』」（“They haue beene formerly only eaten by great personages, because the fruit was not only delicate but rare,” since “This Countrey hath not had vntill of late yeares the skill to nourse them vp kindly”）と言う。[41]　ところが実際、パーキンソンはこれに続けて「しかし今は、［メロン栽培に］よく経験を積み、彼らの土地をよく準備して、ほどよい時期に多くの実りを毎年、収穫する者が多い」（‘but now there are many that are so well experienced therein, and haue their ground so well prepared, as that they will not misse any yeare, … to haue many ripe ones in a reasonable time’）ことや「しかし今は、技術を持ち、［自分たちの主人たちを喜ばせるためではなく］自分のために土地を整える様々な他の人々が、メロンを植え、さらにそれらを一般的なものにしている」（‘but now diuers others that haue skill and conuenience of ground for them, do plant them and make them more common’）と述べて、既に17世紀初期の段階で、メロン栽培がかなり普及しているという現状を強調している。[42]

さらに、植物の分類にあまり厳密ではない者にとって厄介なのは、メロンは、キュウリ（cucumber）と同属であるし、カボチャ（pompion）もメロンと呼ばれることがある、ということである。皆、ウリ科の植物であるからだ。別の言い方をすれば、ウリ科植物の総称である squashes は、pumpkins や gourds から cucumbers や muskmelons まで含み、名称としては交換可能な使われ方をしていた。ジョン・ジェラードの『本草誌』、及びそのトマス・ジョンソン版（John Gerarde, *The Herball or Generall Historie of Plantes*, 1597, enlarged by Thomas Johnson, 1636）でも ‘Muske-Melon, or Million’ のすぐ後に ‘Melons, or Pompions’ の説明が続いており、パーキンソンもまた「カボチャまたは大メロン（または、そう呼ぶ人たちもいるように、メロン）」（‘The Pompion or great Melon（or as some call it Milion’）と記している（図版３参照）。[43]　もちろんキュウリやカボチャのイギリスでの栽培は、メロンに比べてはるかに容易で一般的であったことは想像に難くない。

ともかく、いわゆるキッチン・ガーデンでのメロンらしきもの、の栽培もまた17世紀が進むにつれて広まっていたのではないかと考えられる。ジャーヴェス・マーカムの『田舎の農園』



[illegible] *vulgaris.* The ordinary Cowcumber. 2 *Cucumis Hispanicus.* The long yellow Spanish Cowcumber. 3 *Melo vulgaris.* The ordinary Melon. 4 *Melo maximus optimus.* The greatest Muske Melon. 5 *Pepo.* The Pompion. 6 *Fraga vulgaris.* Common Strawberries. 7 *Fraga Bohemica maxima.* The great Bohemia Strawberries. 8 *Fraga aculeata.* The prickly Strawberry.

図版３

（Gervase Markham, *Maison Rustique or, the Countrie Farme*, 1616）では、野菜スープを作るための豆類に続いてキュウリと共にメロンが列挙されている。また、先に触れた庭師ウィリアム・ローソンが書いた『田舎の主婦の庭』（*The Country Hovse-Wives Garden*, 1618）にもカボチャとメロンが植えられていたような記述が見受けられるし、1577年初版のトマス・ヒル、『庭師の迷路、もしくはガーデニングの新しい技術』（Thomas Hill, *The gardeners labyrinth, or A new art of gardning*）のキッチン・ガーデンにもマスク・メロンが植わっていたようである（'Chap. XXVII Here followeth the ordering of the Kitchin Garden, for Plants, Hearbs, Roots, &c. And first for Cucumbers, Pumpions, Musk-millions, Cabbadges, and Gilly-flowers'）。[44]　重要なのは、キッチン・ガーデンに植えられていたメロンは、高級な果物、というよりはむしろ一般民衆の食する野菜の一種だったということである。ウィリアム・ハリソン（William Harrison, 1534-1593）は、1587年にウリ科の植物が他の野菜と共に貧しい庶民によって栽培されていたことを記録している（'... in my time their use is not onelie resumed among the poore commons, I meane of melons, pompions, gourds, cucumbers, radishes, skirets, parsnips, carrets, cabbages, nauewes, turneps, and all kinds of salad herbs ....'）。[45]　さらに、17世紀後半のものと思われる、種苗商エドワード・フラー（Edward Fuller, fl. 1680-c.1720）の広告には、Sallad-Seeds の項目にキュウリ、カボチャと共に '*English* Melon. *French* Melon. *Spanish* Melon.' の種が、極めて普通に並べられている。[46]　いわば専門家によるレア物としてのメロン栽培の普及とともに、庶民的野菜としてのメロン栽培が一般的になっていく中で、無視できないことは、そして皮肉なのは、もしもヴォン・マルツァーンが主張するように、マーヴェルの「庭」が王政復古後に書かれたものだとすると、メロンが珍しくない時代に、少なくともメロンという言葉の珍しさと高級感が、急速になくなりつつあった時に書かれたことになってしまうということである。換言すれば、マーヴェルの果実をできるだけ高価な、めずらしい品種と受け取るためには、できるだけマーヴェルの「庭」は早く書かれたものと考えるほうが17世紀の庭の実情にあっているのではないだろうか。

ジョン・ローズがセント・ジェイムズ宮殿の庭に温室を建てたという1661年の言及がある。しかし、亜熱帯性および熱帯性植物栽培のために温室が完全なものになるのは17世紀の終わりまで待たねばならなかった。[47]　それでもメロン栽培が一般化した要因は、何よりもその栽培技術の普及にあったことは疑いない。エドワード・フラーの広告の一番下に、他の庭仕事の道具と一緒に 'Melon-Glasses' が売られている。[48]　これとともに、次に述べる発芽生長を促す温度管理の工夫こそが、Mellon-Masters を増やすことにつながったのである。そしてもう一つヴォン・マルツァーンの主張と関連して重要なのは、17世紀の園芸技術を持ってすれば、「メロンは南でしか育たなかったかもしれない」（'... even once established in England, they could only be grown in the south'）という推測や、それに基づいた主張、即ち、メロン栽培可能なマーヴェルの「庭」は、ヨークシャーのフェアファックス卿の庭ではなく、王政復古後にマーヴェルが訪れた南の

ウォートン卿（the Lord Wharton）の庭だという主張が、決定的な説得力を持たないということである。[49]

確かにメロン栽培がイギリスの南部でより容易だったことは疑いない。ジェラードは既に16世紀末に、

> They delight in hot regions, notwithstanding I haue seen at the Queenes house at Saint Iames very many of the first sort [i.e. Muske-Melons] ripe, through the diligent and curious nourishing of them by a skilfull Gentleman the keeper of the said house, called Mr. *Fowle*, and in other places neere vnto the right Honorable the Lord of *Sussex* house, of Bermondsey by London, where from yeere to yeere there is very great plenty, especially if the weather be any thing temperate.[50]

> 私はセント・ジェイムズの女王の館で、その館の管理人、熟練した紳士であるファウル氏と呼ばれる人物によって、勤勉かつ凝った栽培方法で、最初の品種［つまりマスクメロン］がとてもたくさん実っているのを見たことがあるけれども、そしてロンドンの近く、バーモンジーのサセックス男爵閣下の館に近い他の場所で、そこでは年々、特に天候がいくらか温暖であるならば、非常に多くのメロンができるのだけれども、メロンは暑い地方を好む。

と書いている。また、ジョン・トラデスカント・シニアは、1615年にカンタベリーへ移ったのち数年で、St Augustine's にあるウォットン卿（Edward, Lord Wotton）の庭をメロン栽培で有名にしている。しかし注目すべきは、トラデスカントが1614年に購入した記録が残っている「メロンを覆う２ダースの大きなガラス」（'two Doussin great glasses to cover Muske mellon plants'）が示唆するように、いくら南部の温暖な気候とは言っても、勤勉で巧みな庭師が、人為的な工夫をしなければメロンは発芽もせず、実りもしないということである。[51]　19世紀になってもラウドンが説明しているように、温度管理は欠かせない。

> The fruit, to be grown to perfection, requires the aid of artificial heat, and glass, throughout every stage of its culture. Its minimum temperature may be estimated at 65°, in which it will germinate and grow; but it requires a heat of from 75° to 80° to ripen its fruit[.][52]

> その果実は、完全に生育させるには、人工的な熱、そしてガラスの助けがその栽培の全ての段階を通して必要である。それが芽を出し、育つ最低温度は華氏65度（摂氏18度）と推定されるかもしれない。しかしその果実を実らせるには、華氏75度から80度（摂氏24度から27

度）の熱が必要である。

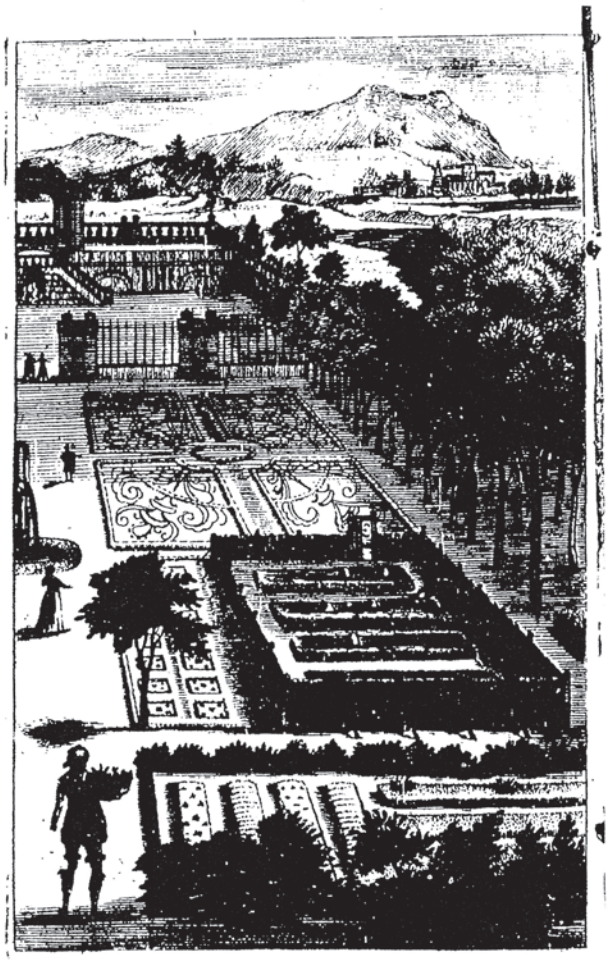
そして、ヴォン・マルツァーンの、マーヴェルの庭はイギリスの南部にあったという説を疑うのに重要なのは、基本的にメロン栽培の人為的工夫が、南であっても北であっても必要であることに変わりがないということである。逆に言えば、イギリスの17世紀の庭において、それが北にあろうが南にあろうがメロン栽培は、可能であるということだ。ヨークシャーのはるか北、エディンバラにあった庭で、少なくとも1683年に ‘common Melons’ が栽培されていたのはこの一つの証拠である。[53]　興味深いのは、人為的な温度管理をした場合、多くの園芸家が、温度が低くなるのを避けることと同時に温度が高すぎてしまうことに注意を払っていることだ。つまり、イギリスの北部で栽培する際も、寒すぎて出来ないということはないのだと考えられる。

まず、メロン栽培にとって庭の囲いは不可欠である。囲いは、トラデスカントが言うように、「メロンを非常に好む猫」のような害獣の侵入を少しでも防ぐだろうし、[54]　何よりも冷たい北風を避け、南に面した壁などの陽だまりが温度を上げる。ジョン・イーヴリンが翻訳した『フランスの庭師』（*The French Gardiner*, 1658）には、メロン畑の挿絵（図版４）付で次のような説明がある。

> To begin then your *Meloniere*, or Melon Plot, you shall choose a place in your *garden* the most secured from pernicious *winds*, which you shall close in with a *Reede-hedge* handsomely bound in *Pannells*, which you shall set up with sufficient stakes or posts fixed in the ground, and sustained, lest the windes overturne them: To this Enclosure you must make a door, which you shall keep under lock and key, that none molest your *Plantation*; and particularly to keep out *Women-kinde* at certain times, for reasons you may imagine.[55]

> それからメロン畑、即ちメロンの区画を作るために、庭の中で有害な風から最も安全な場所を選びなさい。そしてそこを、風が倒してしまわないように地面に固定され、支えられた充分な杭と支柱で立てた横木にきちんと結び付けた、アシの垣根で囲い込むのです。この囲い地に、誰も栽培場を荒らさないように、特に或る特定の時期に、あなたが想像できる理由のために、女性を立ち入らせないようにするべく、錠前と鍵で管理した扉を付けなければなりません。

温度を下げてしまう風を遮断するのみならず、囲まれた庭の中の一角をさらに囲ったメロン畑から女性もが排除されているのは、マーヴェルの「庭」の読者には話者が、エバが創造される以前「男が伴侶なしで歩んでいたときには、／あの楽園はこのように幸せな状態だった」（‘Such



図版４

was that happy garden-state, / While man there walked without a mate', lines 57-58）と嘆息している姿を想起させて興味深い。園芸書で暗示されているのは、女性の生理がその不浄な影響力で果物を傷めてしまうということであろう。[56]　また、同じ1658年にアドルファス・スピードは園芸書『エデンを出たアダム』（Adolphus Speed, fl. 1647-1659, *Adam out of Eden*）の中でメロンを囲いの傍で栽培すること、地面に覆いをすることを奨めている。

> Plant them under a Wall, Pale, or Hedge, on the Sunny side, with very good mould, purposely prepared, and underneath the Mold, lay a quantity of fresh Barly straw, and by this easie meanes, using the seasonable Covertures, and necessary furtherance, you may

attain to your uttermost desire, without any further trouble; but if you do discern the straw to make the earth too hot, thrust in a stake through the mould to the straw, that the vapour and heat evaporate, and passe forth[.][57]

メロンを日のあたる側の壁、柵、もしくは垣根の下に、そのために準備された極めて良い沃土と一緒に植えなさい。そしてその沃土の下にたくさんの新鮮な大麦の藁を敷きなさい。季節相応の覆いと必要な促進方法を使いながら、この容易な方法によって、何らこれ以上の苦労なしに最も満足のいく結果を得ることができます。しかし、藁が地面をあまりに熱くしすぎていることがわかったら、蒸気と熱が蒸発し、出て行くように、沃土を通してその藁に杭を刺し込みなさい。

スピードは、ロンドンの庭を念頭に置いているが、驚くべきは、出版が1683年とはいえ、ジョン・リードの『スコットランド人の庭師』（*The Scots Gard'ner*）は、「他の多くの園芸書が他の地方や気候のためのものであるので」（'because the many Books on Gard'nery are for other Countries and Climates,'）この本は「スコットランドの工夫の才に富むすべての栽培者に」（'To all the Ingenious Planters in Scotland'）向けて書かれていると表明し、「壁の南面にはアプリコット、桃、ネクタリン、ブドウ等などを植える」（'On the south side of the Wall plant Apricocks, Peaches, Nectarines, Vine, &c'）ように指示していることだ。そしてさらに、メロンに関しては、「早い時期には温床で育てなければならない」（'You must raise them on the early Hot-bed[.]'）という指示がある。[58]

リードが北の地方で使った方法は、16世紀の終わりごろから、イギリス全土でメロンを発芽生育させるための常套手段、即ち、家畜の糞尿で作る温床（hotbed）とガラス（Melon-Glasses）によって個々のメロンを温室の中で育てるのと同じような状態にしてやることであった。[59] 1577年のトマス・ヒルの『庭師たちの迷路』にも既に「庭師は、牛馬の糞と苗床の熱によって、果実［即ちメロン］の生長を促進させてやるべきである」（'the Gardener ought to hasten the fruites forward by dung, and heate of the beds[.]'）と書かれているし、先のトラデスカントのメロン栽培の秘訣は、ヤギや牛の糞は強すぎるという理由で、羊の糞（sheep's 'doung'）を使うことだった。[60] 特に北の地方での栽培を念頭において書かれたローソンの『新しい果樹園と庭園』（1648年）では、ヨークシャーの土が家畜によって肥えたものになっていることが述べられている（'The goodnesse of the soil in *Howle* or *Hollowdernes* in *York*-shire, is well known to all that know the River *Humber*, and the huge bulks of their Cattle there'）。[61] サー・ヒュー・プラット（Sir Hugh Plat, 1552-1608）が1608年に出した『フローラの楽園』（*Floraes Paradise*）の中で書いた指示は、改題された1653年の再版本『エデンの園』でも踏襲されている。

Get a load or two of fresh horse dung, such as is not above eight or ten dayes old, or not exceeding fourteene: lay it on a heape, till it have gotten a great heat, and then make a bed thereof an ell long, and halfe a yard broad, and eighteene inches high, in some sunny place, treading every Lay downe very hard as you lay it; then lay thereon three inches thick of fine black sifted mold; prick in at every three or foure inches distance a Muske-mellon seed, which hath first been steeped 24 houres in milke[.][62]

８日か10日以上経っていない、もしくは14日を越えないような新鮮な馬の糞を１、２荷分入手せよ。強い熱を持つまでそれを山と積んでおき、それからその肥で45インチの長さ、半ヤードの幅、18インチの高さの畑をどこか日当たりのいい場所に、それを敷きながらあらゆる部分を強く踏み固めて作れ。それからその上に３インチの厚さのきめが細かく黒い、ふるいにかけた沃土を敷け。３、４インチごとに離して突いて穴をあけて、前もって牛乳に24時間浸しておいたマスクメロンの種を入れよ。

また、1670年には、レオナード・ミーガーの『イギリスの庭師』(Leonard Meager, c.1624-c.1704, *The English Gardener*) が出版されているが、そこでは、家畜の糞に石炭灰を混ぜることが紹介され、より強い熱をより長い間保つ工夫が示されている（'... also some mix their dung with Sea-coal ashes, undoubtedly it doth cause it to have the greater heat, and it may be to hold it the longer'）。そして覆いとしては、藁のみならず帆布やしゅろむしろも利用している（'... then, cover your bed either with old Sail-cloth, or Bass-mats, and straw upon that[.]'）。[63]

＊　この論文は、2011年12月17日、大阪 YMCAにて開催された十七世紀英文学会関西支部第185回例会で「マーヴェルの「庭」と17世紀の庭（拡大版）」として口頭発表した原稿に加筆したものの一部である。

注

24. Blanche Henrey, *British Botanical and Horticultural Literature before 1800*, vol. 1 (London: OUP, 1975) によれば、植物学、園芸学に関する新たな出版物は、16世紀には少なくとも19件、17世紀には約100件（そのうち80件以上は1650年以降）、18世紀には600件以上である。
25. John Prest, *The Garden of Eden: The Botanic Garden and the Re-Creation of Paradise* (1981; New Haven: Yale University Press, 1988), p. 70.
26. Lawson, *A new orchard, and garden*, p. 71.

27. Ibid., p. 3.
28. 例えば、Fynes Moryson, *An Itinerary* (London, 1617), p. 147: 'the inhabitants forbeare to plant Vines, aswell because they are serued plentifully, and at a good rate with French wines, as for that the hilles most fit to beare Grapes, yield more commoditie by feeding of Sheepe and Cattell.'
29. 'Outdoor Vine Culture in England', replies from H. A. and H. C. Andrews, in *Notes and Queries*, 191, 1 (1946), p. 19.　イーヴリンの言葉は、'the most considerable rarity next to the house' である。
30. 例えば、William Hughes, *The Compleat Vineyard: or A Most Excellent Way for the Planting of Vines: Not Onely According to the German and French Way, But Also Long Experimented in England* (London, 1665), sig. A2v: 'I have just cause to accuse the extream negligence and blockish ignorance of our people, who do most unjustly lay their wrongful accusations upon the Soil'. さらに、John Rose, *The English Vineyard Vindicated* (London, 1666) の John Evelyn による 'The Preface' 中の以下の言葉も参照: 'the strange decay of them amongst us for these latter Ages, must needs proceed from no other cause then that of our own neglect'.　既に William Harrison が *Description of England* (1587) の第19章 'Of gardens and orchards' の中で同様の指摘をしている。本来国産ワインはローマ人の時代のみならずノルマン人の征服以来、この島にとても豊富だったにもかかわらず、と書いた後ハリソンは次のように続けている。'Yet at this present, have we none at all or else verie little to speake of growing in this Iland: which I impute not unto the soile, but the negligence of my countrimen' (Raphael Holinshed, William Harrison, and others, *The First and Second Volumes of Chronicles* [London, 1587], p. 208).
31. Abraham Cowley, 'On the Death of Mrs. Katherine Philips', lines 69-73, in *The Complete Works in Verse and Prose of Abraham Cowley*, ed. Alexander B. Grosart, 2 vols. (New York: AMS Press, 1967), i. 165.
32. George Etherege, *The Man of Mode; or, Sir Fopling Flutter*, cf. 'ORANGE-WOMAN: News! Here's the best fruit has come to town t'year. Gad, I was up before four a clock this morning and bought all the choice i'the market.' (1.1.28-30); 'ORANGE-WOMAN: ... Here, eat this peach; it comes from the stone. 'Tis better than any Newington y'have tasted.' (1.1.47-48); 'BELLINDA: ... That which made me willing to go [to the markets this morning], was a strange desire I had to eat some fresh nectarines.' (5.1.41-42), *Four Restoration Libertine Plays*, ed. Deborah Payne Fisk (2005; Oxford: OUP, 2009), pp. 90, 91, 154.
33. John Harvey, *Early Nurserymen: With Reprints of Documents and Lists* (London:

Phillimore, 1974), p. 5.

34. Ben Jonson, 'To Sir Robert Wroth', line 14, in *Ben Jonson and the Cavalier Poets*, ed. Hugh Maclean (New York: Norton, 1974), p. 24. Thomas Carew, 'To Saxham', line 7, in *Ben Jonson and the Cavalier Poets*, p. 164.

35. John Claudius Loudon, *Encyclopaedia of Gardening* (London, 1824), p. 712. ラウドンは、'all the sorts ripen well by the aid of a hot-wall or glass' と続けている。

36. Ibid.

37. Mea Allan, *The Tradescants: their plants, gardens and museum 1570-1662* (London: M. Joseph, 1964), p. 144. Prudence Leith-Ross, *The John Tradescants: Gardeners to the Rose and Lily Queen* (1984; London: Peter Owen, 1998), p. 194. *ODNB* の John Rose の項で、Sandra Raphael は、おそらくローズだと思われる庭師がチャールズ2世にパイナップルを差し出している、オランダの画家ダンケルツ（Hendrik Danckerts, 1630?-?80）の絵にふれながら、これが1670年ごろの作品であり、パイナップルが西インド諸島のバルバドスから初めてイギリスに持ち込まれたのが1657年で、ハンプトン・コートで栽培されるようになった1690年頃までは、イギリス産パイナップルの可能性は低いと述べている。

38. ベルギーの新ストア主義者リプシウスは、『不動心』（1584年）の中で、既に16世紀末には「近年出没するようになった、好奇心にあふれた怠け者の一団」が「虚栄心と怠惰」のために「庭園を持ち」、「外来の草花をこれ見よがしに追い求め」ていると書いている。Justus Lipsius, *On Constancy: De Constantia translated by Sir John Stradling* (1595), ed. John Sellars (Exeter: Bristol Phoenix Press, 2006), p. 78: '... one of that sect, which is risen up in our days, of curious and idle persons who have made a thing that was in itself good and without offence to be the instrument of two foul vices, vanity and slothfulness. For even to this end they have their gardens; they do vaingloriously hunt after strange herbs and flowers, ...'.

39. William Empson, *Some Versions of Pastoral* (1935; London: Penguin, 1966), p. 133.

40. 例えば、Abraham van Beyeren, *A Pronk Still Life with Bowls of Fruit and Other Objects on a Table* (1654); *Still Life with Lobster and Fruit* (1650s), Abraham Mignon, *A Swag of Flowers and Fruit representing the Four Elements* を見よ。

41. Nicholas von Maltzahn, 'Marvell's Restoration Garden', http://myweb.stedwards.edu/georgek/scrc/marvell/newsletter/newssum09.html#Nicholas, 30, March, 2011.

42. John Parkinson, *Paradisi in sole Paradisus terrestris* (London, 1629), p. 525.　それでいてなおかつ、パーキンソンが次の段落でメロンの食べ方を説明していることからすると、依然としてこれが普通の食べ物ではなかったことが窺える。Francis Bacon の庭に描かれた植物がすべてそこに生育していたとは考えにくいが、*The Essayes or Counsels, Civill and Morall* (1625),

‘Of Gardens’ には、８月に収穫する果実の一つに ‘Muske-Melons’（p. 269）が挙がっている。

43. John Gerarde, *The Herball or Generall Historie of Plantes. Gathered by John Gerarde of London Master in Chirvrgerie Very much Enlarged and Amended by Thomas Johnson Citizen and Apothecarye of London*（London, 1633）, pp. 916, 918. John Parkinson, *Paradisi in sole Paradisus terrestris*, p. 526.

44. Gervase Markham, *Maison Rustique or, the Countrie Farme*（London, 1616）, sig. B: ‘About the hedge we shall set, for to make pottage withal, Pease, Beans, and other sorts of Pulse, as also Melons, Citrons, Cucumbers, Artichokes, and such like.’; William Lawson, *The Country Hovse-Wives Garden, Containing Rules for herbs, and Seeds, of common use, with their times and seasons when to set and sow them*（1618; London, 1653）, p. 70: ‘the flowers of trees are as soon perished with cold: as any herbe except Pumpions, and Melons.’; Thomas Hill, T*he gardeners labyrinth, or A new art of gardning*（1577; London, 1651）, p. 57.

45. William Harrison, *Description of England*（1587）, in Raphael Holinshed, William Harrison, and others, *The First and Second Volumes of Chronicles*, p. 208.

46. *A Catalogue of Seeds, Plants, &c. Sold by Edward Fuller, at the Three Crowns and Naked Boy at Strand-Bridge near May-pole, London*. Cf. John Harvey, *Early Nurserymen*, p. 5: ‘In 1688 John Woolridge（or Worlidge）added to the third edition of his *Systema Horti-Culturae, or The Art of Gardening*, first published in 1677, the complete standard catalogue of seeds and plants as sold by Edward Fuller in the Strand’. 17世紀後半にメロン栽培が一般化されていくことは、必ずしも品質の良いメロンがいつも生産されていたということではないだろう。トマス・アンドリュー・ナイト（Thomas Andrew Knight, 1759-1838）は、1811年の論考で、イギリスではメロンほど最大限の完成度で実らせるのが難しい果物はない、費用にも労力にも見合わないので自分の庭師には二度とメロンを植えるなと命じたと言っている。 Thomas Andrew Knight, ‘A concise View of the Theory respecting Vegetation, lately advanced in the Philosophical Transactions, illustrated in the Culture of the Melon.’（Read January 2, 1811）, in the *Transactions of the Horticultural Society of London*, 7 vols.（London: 1812-1830）, Volume 1（1820）, p. 221: ‘There is not, I believe, any species of fruit at present cultivated in the gardens of this country, which so rarely acquires the greatest degree of perfection, which it is capable of acquiring in our climate, as the Melon. It is generally found so defective both in richness and flavour, that it ill repays the expense and trouble of its culture; and my own gardener, though not defective in skill or attention, had generally so little success, that I had given him orders not to plant Melons again.’ この文献を教示してくれた姫路県立大学の石倉和佳教授に感謝申し上げる。

47. John Harvey, *Early Nurserymen*, pp. 46-47. p. 2 をも参照せよ。 *OED* によれば、‘To put (plants) in a hothouse’ という意味での ‘stove’ の初例はFrancis Bacon, *The Essayes* (1625), p. 167 に見られる。しかし、文脈からして温室がイギリスで使われていたということを示すものでもないし、次の *OED* の引用例は、1691年で、名詞 stove (3. A hothouse for plants) の初例も1695年である。
48. *A Catalogue of Seeds, Plants, &c. Sold by Edward Fuller.*
49. Nicholas von Maltzahn, ‘Marvell’s Restoration Garden’; ‘Andrew Marvell and the Lord Wharton’, in *The Seventeenth Century*, 18, 2 (2003), p. 260.
50. Gerarde, *The Herball*, p. 918.
51. Leith-Ross, *The John Tradescants*, pp. 46, 40.
52. Loudon, *Encyclopaedia of Gardening*, p. 763.
53. *Hortus medicus Edinburgensis, or, A catalogue of the plants in the physical Garden at Edinburgh containing their most proper Latin and English names by James Sutherland, Intendant of the said Garden Botanist, and Overseer of the Physical garden at Edinburgh* (Edinburgh, 1683), p. 226.
54. Leith-Ross, *The John Tradescants*, p. 46: ‘Once in fruit the melons had to be warely kept from catts who love them greatly’.
55. Nicolas de Bonnefons, trans. John Evelyn, *The French Gardiner: Instructing How to Cultivate all sorts of Fruit-Trees, and Herbs for the Garden* (London, 1658), p. 137. ‘The Figure at the Frontispiece’ は、p. 134.　17世紀の終わり頃から18世紀初めにかけての様子ではあるが、Chris Crowder, *The Garden at Levens* (London: Frances Lincoln, 2005), pp. 36-37 によれば、囲われたメロン畑の実践例が記録されている。Levens Hall の庭師 Guillaume Beaumont がフランス人であったことは興味深い。
56. Nicolas de Bonnefons, *Le Jardinier François* (Amsteldam, 1661), p. 120 では、本文の引用最後の部分は、‘particulierrement pour en interdire l’entrée aux Fille: & Femmes, en certains temps que le respe[c]t m’empesche de declarer’ となっており、「(女性に対する) 敬意が私にはっきりと言うことをはばからせる、ある特定のとき」とは、生理期間のことであると推測できる。Jennifer Bennett, *Lilies of the Hearth: The Historical Relationship between Women and Plants* (Camden East, Ontario: Camden House, 1991), p. 26 は、女性の生理周期と植物の生育との関係についてデモクリトス、プリニウス、そして William Turner の『新本草誌』(*A New Herball*, 1551) からの引用を紹介している。特にターナーの例 (‘Let weomen nether touche the younge gourdes nor loke upon them, for the only touchinge and sighte of weomen kille the younge gourdes.’) は、メロンもウリ科であるだけに興味深い。Thomas Hill, *The*

*gardeners labyrinth*でも、‘Cucumbers’ と ‘Gourdes’ の箇所で栽培時の最重要注意事項として同様の説明がなされている。 ‘But there must be a speciall care, as *Columella* (after the Greek *Florentinus*) admonisheth, that no woman, at that instant, having the reds or monethly course, approcheth nighe to the fruits, especially handle them, for through the handling at the same time they feeble and wither. ... If she in the place be like affected she shall after kill the young fruits, with her onely look fixed on them, or cause them to grow after unsaverie, or else corrupted’ (The Second Part, p. 131). See also the Second Part, p. 138.

さらに、Thomas Tusser, *Five Hundredth Pointes of Good Husbandry* (1557; London, 1638) の中では、‘For feare of drabs, go gather thy crabs’ (p. 26); ‘Out fruit goe and gather, but not in the deaw, / with crab and with walnut, for feare of a shrew’ (p. 33) と忠告されており、身持ちの悪い女性 (drabs) や口やかましい女 (shrews) が、果樹園運営に対する脅威の一つとして示唆されている。栽培だけでなく、果樹収穫に際しても女性は排除されるべき対象となっている、この例に私の注意を引いてくれた竹山友子氏に感謝する。また、Jennifer Munroe, *Gender and the Garden in Early Modern English Literature* (Aldershot: Ashgate, 2008) は、17世紀中頃までに女性の（家庭菜園ではない）美的庭園での活動が確立したこと、それと同時にそこでの女性の園芸活動が従来の考え方との緊張状態を醸成したことを指摘している (p. 6)。庭空間での Art vs. Nature の関係は従来、男性性対女性性の関係であって、男性の庭師が女性的な自然を統御する空間であった。女性の庭師はそのバランスを崩す故に排除されるとも考えられる。またマンローは、職業的利益優先型の庭への変化が、女性を庭での権威と権力の座から周辺化させた要因であること (p. 27)、その変化を促進した男性による園芸学出版物には、特権化を切望する男性の不安が表されていること (p. 42) をも示唆している。マーヴェルの庭と女性嫌悪に関しては、吉中孝志「マーヴェルの女嫌いの庭再考」『英文学研究』第78巻第１号 (2001年)、1－16頁を、James Shirley の ‘The Garden’ 特にその29行目 ‘No woman here shall find me out’ との間テクスト性については、*Ben Jonson and the Cavalier Poets*, ed. Hugh Maclean, pp. 194-195; Nicholas McDowell, *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars: Marvell and the Cause of Wit* (Oxford: OUP, 2008), p. 190を参照。

57. Adolphus Speed, *Adam out of Eden, or An abstract of divers excellent Experiments touching the advancement of Husbandry* (London, 1658), pp. 96-97. *ODNB* は、この出版を Samuel Hartlib が助けたこと、少なくとも1652年には、原稿が存在していたに違いないことを指摘している。

58. John Reid, *The Scots Gard'ner ... Published for the Climate of Scotland* (Edinburgh, 1683), sig. A2, pp. 91, 95.

59. 北ヨークシャーとほぼ同じ緯度に位置する南カンブリアにある Levens Hall の庭で、温床

とガラスを使って1697年にメロンが栽培されていた確かな記録がある。Chris Crowder, *The Garden at Levens*, p. 32 によれば、所有者 Colonel James Grahme に宛てて代理人は、庭師 Guillaume Beaumont の作業を次のように報告している。'... he has made a hot bed and has sowne the Mellon seeds you sent by post & Cowcumbers and has gotten Frames made and glasses. They are come up finely, he does not doubt but they will doe as well here as any where.'

60. Hill, *The gardeners labyrinth*, p. 151. Leith-Ross, *The John Tradescants*, p. 46.
61. William Lawson, *A new orchard, and garden*, p. 7.
62. Sir Hugh Plat, *The Garden of Eden or, An accurate Description of all Flowers and Fruits now growing in England, with particular Rules how to advance their Nature and Growth, as well in Seeds and Herbs, as the secret ordering of Trees and Plants* (1608; London, 2 edn., 1652), p. 57.
63. Leonard Meager, *The English Gardener: or, A Sure guide to young Planters and Gardeners In Three Parts* (London, 1670), p. 192.　大変人気のあった本で、1710年までに11版を重ねている。

Marvell's Gardens in the Seventeenth Century (Part II)

Takashi YOSHINAKA

Stanza 5 of 'The Garden' conveys, or at least implies, the same message of vanitas as still life paintings. The transient nature of earthly life could be reflected back by the image of the sundial in the last stanza of the poem, which, in this context, may be taken as a variation of the hourglass or the pocket watch often depicted along with a variety of fruit and flowers in that popular genre of contemporary Dutch art. Instead of pursuing what Marvell's words and images try to put across, however, Part II of this paper continues to compare them, especially the image of melons, with what seem to be regarded as seventeenth-century facts in the practices of horticulture and botany.

By 'melons', Marvell seems to mean muskmelons, modern melons which were as rare and 'curious' a kind in those days as the 'peach' in the poem. They could have been an item the rich and the powerful would like to show off in their gardens as much as something precious in their Cabinet of Curiosities. In this sense, Nicholas von Maltzahn may be right in emphasizing the scarcity of melons in England, but positively wrong, I argue, in asserting that 'even once established in England, they could only be grown in the south'. Maltzahn says this in order to argue that Marvell's 'The Garden' was written in a Restoration setting in which the poet had 'plenty of access to more southern gardens, where melons might thrive', such as Lord Wharton's. *Pace* Professor Maltzahn, however, it was inevitable for Melon-Masters to rely on artificial methods of cultivation, and thereby, even the northern climate was not necessarily too cold to grow melons.

Also, if Marvell's 'melons' meant muskmelons and were an upper-class status symbol, it would be more appropriate to assume that the date of composition of 'The Garden' was before the Restoration rather than after, because the fruit in question, or at least the word 'melons', became more and more prevalent, and accordingly it must have come to sound less and less precious and rare as the seventeenth century progressed. In fact, there was much taxonomical confusion surrounding 'melons'. The musk-melon is a kind of cucumber, and pumpkins or pompions were called melons in those days. The latter must have been grown with greater frequency than modern melons both in the north and in the south of England, especially in kitchen gardens. It may be possible to assume — or at least the word allows the possibility — that Marvell's 'melons' in 'The Garden' could signify, to a greater extent in the second half of the century, those planted in kitchen gardens, and should not necessarily be taken as being as rare and 'curious' as the 'peach', but as being as common as 'apples'.